昭和大阪の文士劇「風流座」第一回公演

増　田　周　子

はじめに

文士劇とは、「劇評家・画家・文筆家たちにより演じられる素人芝居」[1] を指す。明治 23（1890）年、小石川水道端の佐藤黄鶴邸で尾崎紅葉、江見水蔭、川上眉山、巌谷小波ら硯友社の人達が始めた硯友社劇が日本の文士劇の始まりであるとされる。その後東儀鉄笛らの易風会、岡鬼太郎ら劇評家の組織による若葉会で演じられた。明治 39（1906）年には毎日新聞演劇会が生まれて、明治 43 年には文士劇協会を組織した。大正期は各派合同の演芸通話会によって継続した。昭和 9（1934）年文芸春秋社の愛読者大会で文士劇を上演し、その後、久米正雄、川口松太郎、今日出海、小林秀雄らが『父帰る』『ドモ又の死』『息子』などを上演していく。第二次世界大戦後も昭和 27（1952）年に復活して、以降毎年秋に続けられたが、昭和 53 年にコストがかかるという理由で残念ながら廃止された[2]。だが、盛岡文士劇は、戦後に文芸春秋社が始めるより 3 年早い戦後昭和 24（1959）年から始まり、平成の今も続いている。また、日本推理作家協会も平成 9（1997）年 9 月 27 日、日本推理作家協会設立 50 周年を記念して、よみうりホールにて、協会会員の推理作家総出演による文士劇「ぼくらの愛した二十面相」を上演した。

このように、文士劇は、さまざまなところで、今現在も続けられているのである。こう考えると、文士劇は、実に 120 年以上の歴史を持つ。では、いったい何故、素人芸なのにこんなに長く続いたのであろうか。文士劇に何度も出演してきた小林秀雄は「役者」の中で次のように言及する。

> たかが文士劇だ、無論やる当人もそう思っていた。ところが、やってみると文士劇も芝居であると合点した。芝居という或るどうにもならぬ世界があって、其処へ、文士劇であろうが、何劇であろうが、這入って行く、どうもそういうものらしい。[3]

つまり、素人の文士であれ、芝居には一種独特の魔力のようなものがあり、没頭してしまうらしい。文士劇経験者の石原慎太郎も「人間には演技本能もあるそうで文士とて例外でなく、一旦出演の決心をして役をもらえば誰しも夢中になる。夢中にはなってもその結果はとても当人の期待通りにはいかずに、

1）神永光規『国史大辞典』（1991 年 6 月、吉川弘文館）
2）同上書、ならびに『日本近代文学大事典第 6 巻』（1980 年 3 月、講談社）
3）小林秀雄「役者」（『文芸春秋』1960 年 3 月）

文士劇ならではの悲劇喜劇となる」[4] と述べる。上演の結果は、必ずしも成功するとは限らないが、文士を「夢中」にさせ、役に熱中させる魅力が文士劇にはあるようだ。この文士劇の魅力が、長期に続いてきた一要因となっているのであろう。

さて、大阪の画家、鍋井克之（1888年8月18日－1969年1月11日）も、文士劇の魅力に憑りつかれたのだろう。関東方面中心に行われてきた、文士劇に一石を投ずるべく、昭和26（1951）年、大阪の地で、文士劇の劇団「風流座」を立ち上げた。この「風流座」は、大阪、京都、神戸など関西の、当時一流の画家、文士、評論家など、芸術家たちを集結させた劇団であった。この鍋井たちの劇団「風流座」はどんなものだったのだろうか。

本稿では、これまで、ほとんど研究されてこなかった大阪の文士劇「風流座」に注目し、その第一回公演の成り立ちや活動の一端をまとめてみる。

1 「風流座」の結成

「風流座」は、どのようにして結成されたのか。「風流座」第一回公演プログラムの「ごあいさつ」には、次のように書かれている。

当『風流座』は、東京での文士劇『鎌倉座』に呼応して、昨秋以来、われわれ同人の間で、その結成をいそいでゐたものですが、今日めでたくその第一回公演を持つ運びに到りました。これも一重に皆々様の御愛顧の賜物と厚く御礼申しあげます。

御承知のとほり『風流座』は京阪神在住の画家・作家を中心とした素人ばかりの集まりですから、決して、これは小むつかしい演劇運動といったものでは毛頭ございません。だが、さればとて、いたづらに通人めかした謂はゆる道楽芝居でもございません。わたくしたち同人が『風流座』に寄せてゐる理念は、この目まぐるしい変転の現代に、しばしながらも、本当に生活らしい生活の憩ひを持ちたいこと、例へば、さんさんと降りそゝぐ太陽のもとで、大らかに仮面劇を楽しんだ古代アテナイ人の心を心としたいことなのです。といふことは、結局、みんなで明るく朗らかに遊ぶことに他なりません。

正しい意味での「遊び」は生活の彩色です。生活の彩色はまた生活文化の正しい根源であるべきです。

ずゐぶん、お目まだるき素人役者ばかりの舞台ですが、観客席の皆さまと御一緒に、今日一日を楽しく明るく遊ぶことができさへすれば、『風流座』の目ざすものは十分に達し得られたと存じます。

右、ごあいさつまで。

昭和二十六年五月吉日　　『風流座』一同

4）石原慎太郎「文士劇の迷優たち」（『中央公論』1959年1月、文芸特集号）

この「ごあいさつ」は、毎日新聞社の山口廣一が書いた挨拶である[5]が、「風流座」は「東京での文士劇『鎌倉座』に呼応して、昨秋以来、われわれ同人の間で、その結成をいそいでゐた」とある。「鎌倉座」とは何か。宇野浩二は、昭和25年の出来事として「鎌倉座」について以下の如く記している。

> 『鎌倉座』とは、その年の十一月三日（文化の日）に、鎌倉在住の有志（あるひは物ずき）の文人が、鎌倉市民座で、菊池寛の『父帰る』と里見弴の『翅無鳥』を、演じた、速製の、素人劇団である。しかし、速成（ではないかもしれないが、まあ、思ひつき）の素人劇団でありながら、東京をはなれた鎌倉でもよほされたにもかかはらず、一部の人たちの間に妙に有名になり持てはやされた。[6]

すなわち、「鎌倉座」とは、昭和25年11月3日に、鎌倉市民座で菊池寛の『父帰る』と里見弴の『翅無鳥』を上演した鎌倉在住の文士たちの作った、素人劇団であった。山口廣一は昭和25年のことを以下のように回想している。

> 昨年の十月だつたか、大佛次郎さんが京都へ見えた。例の「帰郷」の撮影で、小暮実千代、佐分利信なども一緒だつた。
>
> その節、私たち毎日新聞社の連中で、一夕、大佛さんと吉井勇氏を岡崎の「つるや」へお招きした。たまたまその席上で、大佛さんから「鎌倉座」のはなしが出た。
>
> 「鎌倉座」はご存じのとほり、この大佛さんの西下に先立つ一ヶ月ほど前、鎌倉の市民館で公演された里見弴氏を中心に久米正雄、真船豊、久保田万太郎、今日出海、永井龍男ら諸氏の出演になる素人芝居なのだが、その「鎌倉座」の楽屋ばなしが、酒席での座興に出たのである。[7]

山口は、大佛から「鎌倉座」の楽屋ばなしを聞かされた、この酒席の会の開催が「昨年の十月だつたか」と述べるが、「鎌倉座」公演は昭和25年11月3日のため、10月というのは勘違いであろう。宇野浩二は、「去年（つまり、昭和二十五年）の秋の末（か冬のはじめ）の頃」と述べるので、その頃が正しいと考えられる。それはともかくとして、この酒席で大佛から次の話がされた。

> 次ぎの公演には里見弴さんの弁慶、大佛さんの富樫、久保田さんの義経で、「勧進帳」が予定狂言に上がつてゐるが、大佛さんの富樫はこれからそろそろ長唄なるものを勉強しようといふシロモノだし、里見さんの弁慶は初日の舞台で必らず一度転んで見せる、さうすれば俄然二日目から客足がよくならう、といつた式の他愛もない笑ひばなしだつた。酒の席はこんな馬鹿ばなしに限るのである。大佛さんも相当ご酩酊だつた。飲めない私も、これには手を拍つて喜んだ。[8]

5）山口廣一「愛愚歌舞伎―『風流座』の公演について―」（『幕間』1951年6月）
6）宇野浩二「風流座―に事よせて―」（『思ひがけない人』1957年4月、宝文館）
7）5に同じ
8）同上

「鎌倉座」の劇は、大佛の話によると里見が転んで見せたり、大佛の長唄も滑稽だったりと、いかにも素人くさく、笑いを誘うようなものだったらしい。宇野浩二も大佛の話す舞台や俳優の様子を以下のように述べる。

> 『父帰る』を久保田万太郎が演出し、『翅無鳥』は里見弴が演出し、『父帰る』の配役が、父が久米正雄、兄が永井龍男、弟が今日出海、母が賀原夏子（「文学座」の女優）、妹が山内愛子（里見の次男の鉞郎の夫人）といふやうな顔ぶれであり、『翅無鳥』は、作者の里見が主役、その他の配役はすべて里見の身内、さうして、座長が里見弴、といふやうな仕組であるから、ちよつと見たところは平凡なやうであるが、しかし、これらの、名にしおふ、それぞれ、特徴のある、人間たちが、芝居をしたのであるから、これが、おもしろからぬ筈がない。それを、また、大佛次郎が、さわやかな弁舌で、おもしろをかしく、述べたてたので、毎日新聞社の学芸部の連中は、まことに、興ふかく、傾聴した。[9]

「鎌倉座」が、演劇素人の文士たちと里見の家族たちで成立しており、それらの個性が特徴的で、なおかつ大佛の話も面白いので、「その酒席に並み居た、大阪毎日新聞社の学芸部の面面は、みな、ことごとく、感動した。殊に、その人たちの中で、ふだんから演劇の類にもつとも（『やまひ』と思はれるほど）開心をもつてゐる、副部長、山口廣一は、この大佛の話に、夢中になつて、しじゆう、耳をかたむけ、ときどき、拍手したほど、感激した」[10] のであった。なお、宇野浩二によると、この酒席では、「鎌倉在住の文士たちの中の有志の者が、その前の年（つまり、昭和二十四年）の十二月三十日に、久保田万太郎の還暦の祝ひとして、三越劇場で、『鈴ヶ森』を上演した話」も大佛により、巧みに語られたという。山口はじめ、毎日新聞社の記者たちは、大佛が「『鎌倉座』の演劇と三越劇場の芝居の成立と光景」をさも興味深く、面白そうに述べたために、強烈な刺激を受けたのであった。そして、

> さうして、その山口の感激は、情熱となり、大阪に帰つてからも、その「情熱」はなかなか冷めなかつた。山口はその「情熱」の遣り場にこまつた。しかし、それとともに、山口の心の底に、かすかではあるが、大阪にも、そのうちに、『鎌倉座』のやうなものが、……といふやうな思ひもおこつた。が、そのうちに、山口は、社の仕事のいそがしいのに追はれ、いつとなく、あの大佛の話も、（ときどき、思ひ出して、胸のをどるやうな事はあつたが、）つい、忘れがちになった。[11]

それから間もなくして、寿海の後援会の「風流くらぶ」の第三回の集まりが、山口によると、文楽座の食堂で行われた[12]。この「風流くらぶ」とは、宇野浩二の言説によると「風流くらぶ」という名称ではなく「風流会」と呼ばれていて「市川寿海を中心にして、寿海に好意をもつ数人の人が、会員となつて、月に一回、（あるひは、二た月に一回、あるひは、適当な日に）、その時その時、しづかな部屋のあ

9）6に同じ
10）同上
11）同上
12）5に同じ

る料亭（あるひは個人の邸宅）で、寿海をかこんで、四方山の話をかたりあふ、ささやかな会である」[13]という。そして「この会を思ひ立つたのは、寿海が、数年前に、寿美蔵時代に、東京をおちて、大阪の劇場を根城にするやうになつてから、陰になり日向になりして寿海を後援してゐた、山口廣一である。さうして、その『風流会』の顔ぶれは、たしか、（よく知らないが、）菅楯彦、鍋井克之、中村貞以、その他である」[14]と宇野は述べる。「鎌倉座」の話が、その文楽座の食堂での席上でも話題にされたという。

> その席上に、幸か不幸か、鍋井克之画伯に中村貞以画伯なる至極心臓のお強い両先生が同席されてゐた。そして、この「風流くらぶ」の帰途、心斎橋近くのバーに落ち合つた右の両先生や私たち友人仲間で、「大阪も東京に負けんように、一つ派手な文士劇でもやろやおまへんか」といふことになつた。酒の勢ひもあつて、思はず私もその提案に「そやそや」と付和雷同的な賛成をしてしまつた。[15]

このようにして、大阪の画家鍋井克之、中村貞以、市川寿海、毎日新聞社の山口廣一らの酒席での賛同により、「風流座」は結成されることになったのである。ただ山口の回想と宇野浩二の回想では、若干、事のいきさつが異なる。山口の回想では、昭和25年の11月か12月、少なくとも、昭和26年の1月中頃までには、「風流くらぶ」なる寿海の後援会が開かれたようであるが、宇野は、「その頃（三月のをはり頃、）大阪の郊外のある料亭で、『風流会』がひらかれた。」「その三月のをはり頃にひらかれた『風流会』は第一回であつた」[16]と述べているので、二人の回想には、およそ二ヶ月～三ヶ月程度の差がある。宇野は、この会合で何が話されたのかを次のように詳細に記している。

> その『風流会』の席上で、山口は、ふと思ひ出して、ずっと前に大佛から聞いた、『鎌倉座』と三越劇場の『鈴ヶ森』の話などをしてから、一杯機嫌で、「……どうだす、大阪でも、画家や文士の先生方が、すきな人が、あつまつて、『鎌倉座』のむかふを張つて、『鎌倉座』のやうなもんを、やりはつたら……、」と、いつた後で、「旧劇をやるんやつたら、寿海さんに、おねがひして、指導してもらふんだすな、」と、つけくはへた。すると、そばにゐた、鍋井が、すぐ、「それは、おもしろい、」と、応じ、中村貞以も、はなれた席から、「それは、なるほど、おもしろさうだんな、」と、賛成した。そこで、寿海も、しづかな声で、「それは、たいへん結構ですな、」と、いつた。[17]

このような会合がいつ開かれたかは、はっきりしないが、本稿の第2章で、説明する「風流座」の準備のことを考慮すると、やはり山口の言うように会合は、昭和25年11月か12月、あるいは翌年の1月中頃までに開催された可能性は高いと考えられる。それはともかくとして「鎌倉座」に対抗して、鍋井克之、中村貞以、毎日新聞社の山口廣一たちが、意気投合し「風流座」を結成したことは間違いないで

13）6に同じ
14）同上
15）5に同じ
16）6に同じ
17）6に同じ

あろう。こうして、「風流座」での演技指導は、東京を離れ、大阪で人気を博していた、歌舞伎俳優寿海に頼むことになったのであった。ただ、宇野によると、山口はすっかり約束を忘れていたらしい。宇野は以下のように記している。

> ところが、『風流會』のあつた翌日、翌翌日ぐらゐまでは、山口は、あの面白かつた会（ことに、空想の劇団の話）を思ひ出して、なんともいへぬ楽しい気になつたが、一日二日と日が立つうちに、自分がいひ出した、「『鎌倉座』のむかふを張つて、『鎌倉座』のやうなもんを、……」といつた事など、ほとんど、きれいに、忘れるともなく、忘れてしまつた。ところが、そんな事をまつたく忘れてしまつた時分に、紀州の白浜に写生に行つてゐる鍋井から来た手紙のなかに、「……お富のことをかんがへると、仕事がちつとも手につかない、」といふ意味の文句があつた。これを読んだ山口は、いたく心を動かされた。三度の食事より芝居がすきであり、芝居のほかにもいろいろな物に興味をもちながら、一たん仕事にかかると、なにもかも打ち捨てて、仕事に熱中してしまふ鍋井の性質を、山口は、知りすぎるほど、知つてゐるからである。が、それとともに、山口は、酒の上とはいひながら、自分が、うつかり、牛分ぐらゐ冗談のやうに、いつた事が、俗にいふ『瓢箪から駒が出る』といふ譬えどほりになりさうな気がして来た。しかし、それも、鍋井の手紙をよんだ時、ふと、さう思つただけで、一時間ぐらゐたつと、そんな事は、すぐ、忘れてしまつた。さうして、それも、日が立つうちに、いつとなく、忘れてしまつた。[18]

山口は、鍋井が白浜から投函した「お富のことをかんがへると、仕事がちつとも手につかない、」という手紙にかなり心惹かれるが、すぐに忘れてしまった。しかし、さらにこんなことがあった。

> すると、白浜にゐる鍋井から、その手紙がきてから一週間ほど後、めつたに手紙などもらつたことのない、中村貞以から、山口は、手紙をもらつたので、ちよつと不審に思ひながら、封をきつてみると、その手紙のなかに、このあひだ、『三越』に行つたとき、念のために聞いてみたら、「あそこの八階のホオルは、いつでも、貸す、といつてゐましたから、いつか、『風流会』で話の出ました、あの芝居が成り立つやうに、お骨をりくださいませんでせうか、」といふ意味の文句があつた。この手紙の中のこの文句を読みながら、めつたに感動などをしたことのない山口も、かなり感動した。これは、この文句を読みながら、いつかの鍋井の手紙のなかの、あの文句を思ひ出したからでもある。さうして、山口は、この中村の手紙を読みをはると、あの『風流会』の席上で、白分か冗談のやうに述べた事を、なんとかして、実現してみたい、と、思ひたつた。さう思ひたつと、山口は、これは、まづ、鍋井と相談し、鍋井の智恵を借りたい、と、かんがへた。[19]

鍋井克之からだけでなく、中村貞以からも書簡が届き、しかも中村からは、三越デパートの八階を借りる約束まで取り付けてきたという内容が手紙に書かれていたため、山口はようやく、「風流座」の実現

18）6に同じ
19）同上

に向けて実際に動き出し、鍋井と相談することに決めたのであった。「風流座」の実現のためには、大阪の画家、鍋井克之、中村貞以の相当熱心な努力があったのである。

2 「風流座」の上演題目の選定

座名を「風流座」としたのも、寿海の後援会の名、すなわち宇野の言う、「風流会」、山口の言う「風流くらぶ」の風流という会の名に因んだのは一目瞭然である。山口廣一によると、「風流座」の結成が決まってからは大急ぎで準備をはじめていった。

> 二月の中旬、忘れもしない近年稀れな大雪の降つた日、鍋井、中村それに私と三人の連名で、これぞと思しき友人たちへ「風流座」出演の勧誘状を発送した。そして、同月下旬の二十六日、三越の七階食堂で、先づ第一回の準備会を持つたのだが、世間は廣いもので、第一回の準備会から上村松篁、長沖一、土岐国彦、古家新、宇井無愁、岸本水府、船越かつみ、加藤敏子ら約三十名に近い同志の御出席をいたゞいた。それから、三月にかけて十数回の準備会を開いて具体案を練つた。[20]

「風流座」の結成が決まり、すぐに三〇名近い文士、画家らが鍋井たちの呼び掛けに応じ、たった一ヶ月くらいの間に、数十回もの準備会合に集まって「風流座」で、何を演じるか、その演目などを話し合った。この準備会以前の、「風流座」の結成が決まった時の酒宴で、宇野浩二によると、次のように演目が話し合われていた。

> 酔ひのまはつた山口が、誰にいふともなく、「……やるとなれば、どんな狂言がよろしおまつしやろ、」と、調子づいた声で、いつた。と、それが切つ掛けとなつて、「ぢやあ、こつちでも、『鈴ヶ森』をやりまよか、」とか、「いや、こつちは、やるとしたら、歌舞伎と新劇を、両方やろやないか、」とか、「いや、こつちは、旧劇だけで、いこ、」「そや、そや、」とか、「旧劇やったら、……『玄冶店』か、『河内山』か、……『鈴ヶ森』なども、おもろいな、(註―東京で「おもしろい」を大阪では「おもろい」といふ)」とか、「……『玄冶店』なら、さしづめ、鍋井さんが、与三ちふとこやな、」「いやあ、僕は、与三では、ちよつと背エが低すぎる、」「そんなら、あんたは、お富だんな、」「それは、ええ、(註―東京で「いい」といふのを大阪では「ええ」といふ) それは、ええ、」とか、「……河内山は、中村はんがええな、」「滅相な事 (註―東京で「とんでもない事」といふのを京・大阪では「めつさうな事」といふ) いひなはんな、」「そんなら、あんたは、与三や、」「それも、あかん、(註―東京で「いけない」といふのを大阪では「あかん」といふ) あかん、」とか、一座の者が、めいめい、おもひおもひの事を、勝手な事を、いひあつた。[21]

こういうことが、すでに雑談の中で話し合われていたからか。山口は、「上演狂言の選定は比較的容易

20) 5に同じ
21) 6に同じ

だつた」と述べている。一方で「配役はなかなかおいそれと決まらなかつた。配役全部の最後的決定を見るまでに、丸一ヶ月もかゝつた」[22] という。配役の選定には苦難があったのである。こうしてようやく上演題目と配役が、決まった。それを列記しておく。

演し物と配役

歌舞伎指導　市川　寿海
同　補　導　市川　寿美蔵
新劇演出　梅本　重信

第一　お目見得だんまり

大　百	上村　松篁	若　衆	宇井　無愁
色　奴	小磯　良平	赤　姫	中村　青子
武者修業	長沖　一	草刈娘	船越かつ美

第二　与話情浮名横櫛＝源氏店

お　富	鍋井　克之	多左衛門	長谷川幸延
斬られ		番頭藤八	初音　麗子
与三郎	竹中　郁	女　中	山本　直治
蝙蝠安	古家　新	権　助	木村　純一

第三　恋愛病患者　菊池　寛・作　藤井二郎装置

大学教授		貞一妻	
佐々木貞一	長沖　一	さだ子	坂本　富江
長男　哲夫	宇井　無愁	長女敏子	初音　麗子
医大助手			
松村謙一	野尻　弘	次女久美子	船越かつ美

第四　鈴　ケ　森＝題目塚の場

幡随院		飛　脚	藤間　竹遊
長兵衛	中村　貞以		
白井権八	鍋井　克之	雲　助	大　勢[23]

以上、当代の、一流画家や作家たちの名が連なっていることがわかるであろう。山口は、自身は出演しなかったが、「それでも、稽古場への日々の連絡と三越や松竹との交渉で、約二ケ月のあひだ相当に忙

22）5に同じ
23）『「風流座」第一回公演プログラム』チラシ

しい目に遭つた。私としても、近ごろ、これほどの心労はなかつた」[24] と語る。素人劇団の立ち上げにはかなりの苦労があったのである。

3 「風流座」の稽古の様相

配役の選定に時間がかかり「風流座」の稽古がはじめられたのは、かなり遅かった。山口によると、「いよいよ本読みを始めたのが四月五日、それから公演までのあひだ、さらにまた一ケ月にわたつて道頓堀松竹寮での猛稽古が続けられた」[25] という。宇野浩二は、昭和26年3月中旬頃の、鍋井克之と山口廣一の会話について、次のように記している。

> 「……竹中（註―詩人の竹中郁）の与三は、柄はなかなか立派やけど、セリフは棒のんだやうに単調やからなあ、」とか、「……そのかはり、蝙蝠安は、うまくいくやろ、古家（註―行動美術会の画家、古家新）は、柄ははまつてるし、熱心やからな。……どこやらで、『玄冶店』のレコオド（註―先代羽左衛門の与三郎、先代梅幸のお富、先代友右衛門の蝙蝠安）を買うて来よつて、それを、こんど、半月ほど、北海道イ旅行すのンに、持つて行きよつて、それで、旅行ちゆうに、蝙幅安の稽古をするちふとをるさかいなあ、」とか、「……一ばん心配は、やつぱり、番頭の藤八やなあ、あの三枚目（註―ここでは道化役といふ意味）の役は、本職の役者でもちよつとむつかしい役やからなあ、……　なかつたら、仕様がない、初音麗子（註―元宝塚の女優で、月組の組長として、二十年間、舞台に立ち、昭和十九年四月に退団したが、その後も、映画、実演、ラジオなどに出てゐる）にたのも、」とか、「……小磯（註―新制作派協会の会員　画家小磯良平）を、どうしても、ひつぱり出しまよ、」とか、上村松篁（註―創造美術協会の創立者、上村松園の嗣子、画家上村松篁）も、どうしても、たのみまよ、松篁は、たしか、前に、素人芝居に、出たことがあるさうだす、」とか、「長谷川幸延（註―大衆作家、大阪の芸人を書くのが得意）や、宇井無愁（註―ユウモア小説の大衆作家）などは、むろん、大丈夫や、」とか、その他、等等等である。[26]

かなり、人によって実力の差が違うので、3月の中旬になっても苦心している様相がわかる。山口も

> なにぶんにも、出演者の顔ぶれが広範囲なので、稽古の差繰りが困難だつた。稽古をはじめ出した最初のあたりは、正直なところ、どうなることかと案ぜられた。その一例をいふなら、竹中郁君の「玄治店」の与三郎など、最も頭痛のタネだつた。だが、それも、案じるより生むがやすいで、稽古が始ると、この竹中君の与三郎が実に稽古熱心なのである。その努力が酬ひられてか、公演の間際には、多少フランス好み（？）の与三郎ながら、とにかく一応江戸生世話の感じに近くなつて来た。[27]

24）5に同じ
25）同上
26）6に同じ
27）5に同じ

と述べている。もともと一流の文士や画家たちだけに、稽古に対しても一流で熱心だったようである。ど素人でも、稽古を続けるうちに、熱心さが功を奏して、竹中郁もうまくなっていったようだ。「小磯良平さんの『だんまり』の色奴も、まるで中学生が幾何の問題でもやるやうに足の運びを図解で勉強してなどゐた」[28] そうだ。「そのほか、長沖君にしろ、宇井君にしろ、上村松篁さんにしろ、みんな、ずゐぶん無理な時間の都合をして稽古場へ通つていただけた」[29] とあり、忙しい中で、みな猛稽古を重ねたのである。

昭和26年5月1日、宇野浩二は、「風流座」の第一回公演を観劇するために、来阪した。宇野は「九時に東京駅を出る『ツバメ』に、九時三分前に、乗り」込み、「ちゃうど午後五時」[30] に大阪に着いた。約束どおり、駅の東口の改札口のそばに、木村純一（註―鍋井の女婿）が待つていてくれ、二人で「タクシに乗つて『南』（註―大阪では南の方の繁華街を『南』といふ）に行つて、法善寺裏の『江戸子』といふ簡単な日本料理屋で、食事をすまし、それから、あまり遠くない、といふので、光ホテルへむかつた」。鍋井は、その日も猛稽古をし、午後8時すぎに光ホテルに宇野が戻ると、すでに疲れて寝ていた。[31]

4 「風流座」第一回公演

a 「風流座」第一回公演の劇場と楽屋の様相

いよいよ昭和26年5月2日、新大阪新聞社主催、松竹株式会社を協賛として「風流座」第一回公演の日が来た。当日の、宣伝文句は、以下のようにある。

関西在住画家・文人による

風流座

いよいよ第一回旗上げ興行

東西々々……ここもと御覧に入れまするは　関西にこのたび生れ出ました文士劇「風流座」―中村貞以　鍋井克之　小磯良平　宇井無愁　長沖一ら著名画家　文人大一座による第一回旗上げ興行は愈よ開演の運びと相成りました
通人めかしたお道楽芝居でもなく　むずかしい演劇運動でもなく　観客の皆様と一日を明るく楽しもうという趣向　何とぞ賑々しく御来場賜りますよう願い上げます

とき　　五月二、三、四日（毎日午後一時開演）
ところ　大阪・三越劇場（三越八階）

28）5に同じ
29）同上
30）6に同じ
31）同上

会員券　二〇〇円　前売券は二十五日から中央（大阪駅）　三越　大丸　高島屋ほか各プレイガイドで発売

主催　新　大　阪　新　聞　社

協賛　松　竹　株　式　会　社[32]

「観客の皆様と一日を明るく楽しもうという趣向」というのが謳い文句であった。なお、「抽せん券つきのプログラム購入者には出演者および各界から贈られた色紙と短冊が毎日十四枚ずつ贈呈される」[33] ことになっている。当日の三越劇場は以下のような様子だった。

風流座プログラムチラシ

三越の二階の陳列窓に、（二つの陳列窓を犠牲にして、）商品は何もおかずに、『風流座』の看板が出てゐる。菅楯彦の『だんまり』、中村貞以の『玄冶店』、田村孝之介の『恋愛病患者』、矢野橋村の『鈴ケ森』、の四つである。これは、当世のはやりの言葉でいふと、まづ、豪華板といふべきであらう。[34]

華やかに飾った「風流座」の豪華な看板の様子がよくわかる。また、階段の途中には、次のような花輪が飾られていた。

『風流座』の公演されるのは、三越の八階のホオルであるから、そこへ行くには、七階でエレベエタアをおりて、エレベエタアのななめ前にある階段をのぼらなければならぬ。その階段をあがる前に、まづ目をひくのは、階段のあがり口の両側に立ててある、『風流座賛へ　大佛次郎』と染めた茶色の二本の幟である。それから、その階段の左側の床の上に、花環があつて、その花環の前につけてある、『鍋井権八さん』、『中村長兵衛さん』と、御両人の名をならべて、かういふ風に書いた紙なども、目についた。花環といへば、階段が中途でまがつてゐるので、その中途の踊り場にも、三つぐらゐ、それから、階段をあがっだところの右側にも、五つぐらゐ、（その中に、『鍋井克之君　宇野浩二』といふのがあり、）更にそこからホオルまでの三間ぐらゐの廊下の右側にも、十二三ほど、（その中に、『風流座へ　里見弴』といふのがあり、）少しでも空いた所には、花環がかざりたててあるので、これも、当節のはやり言葉でいへば、花環のオン・パレエドといふのであらうか。（中略）このやうに花環が多すぎたので、ちやうど『風流座へ　里見弴』の花環の、廊下をへだてた真向ふ

32）24 に同じ
33）無署名「宇野浩二氏も客席で応援　きようから『風流座』旗挙げ公演」（『夕刊新大阪』1951 年 5 月 3 日）
34）6 に同じ

に、『細雪（註―焼酎の名である）』に『鍋井克之先生』とかいた札がはつてあるのが、誰の目にも、ついた。これが、かりに、広告のために、『鍋井克之先生』に贈呈したものである、とすれば、（もつとも、商人がよくやる『手』であるが、）実に抜け目のない宣伝ではないか。[35]

「鎌倉座」の大佛次郎や里見弴からも多くの花輪が届いていた。花輪については、宇野は「ここの花環のパレエド（parade）は、いささか、『見せびらかし』の観なきにしも非ずの観があり、少しうるさく見えた。」「肝心の芝居を見る前に、花環の展覧会を見せられたやうな気がした」[36] と述べ、絢爛で、くどすぎる花輪の様子を物語っている。さらに宇野は、大阪三越劇場の楽屋の様子を次のように記している。

楽屋は、妙な所にあるばかりでなく、まつたく楽屋の体裁をなしてゐない。「妙な所」といふのは、ホオル（ホオルの裏）から五六間はなれたコンクリイトの上に立てられてあるからである。「まつたく楽屋の体裁をなしてゐない。」といふのは、十五六坪の、長方形の、四方のうち一方だけにガラス窓のある、バラツクであるからである。[37]

このような、楽屋構造であったらしい。

想像を逞しくすれば、『風流座』が楽屋につかつてゐたのは物置を改造したものではないだらうか。改造といへば、このホオルはこれまで演劇につかつた事がないさうであるから、あの舞台の左の隅に斜めにつけた三間ぐらゐの花道をつける時、ついでに、舞台につかつた所もかなり手を入れたのではないか。いづれにしても、あの楽屋は風変りであり、あの楽屋の光景は珍妙であった。[38]

「風流座」の楽屋は、物置を改造したような粗末なものであったようだ。続けて、宇野が楽屋を見た様子を次のように記している。

舞台の裏の出入り口から、踏むとガタガタといふ音のする、ところどころに隙間のある、低い板の台でつないである、廊下のやうな所を五間ぐらゐあるいて行くと、それが、右に、鈎の手になつて、三間ほど行くと、その楽屋の土間にはひる。土間は幅が一間ぐらゐで長さが三間ほどである。さうして、その左側の長方形の二十畳ぐらゐの部屋が、すなはち、『風流座』の楽屋である。さうして、その部屋は、右側も、土間と反対の側も、板壁で、左側は、ガラス障子がはまつてゐるが、そのガラス障子のはまつてゐる下の腰は、半間ぐらゐの高さで、これも、板壁である。

私が、鍋井と一しよに、そこにはひつて行つた時は、土間の隅の三分の一ぐらゐに、靴と下駄が

35）6に同じ
36）同上
37）同上
38）同上

乱雑に脱ぎ捨てられてあり、部屋の中には既に二十人ちかくの人が立つたり坐つたりしてゐた。[39]

「風流座」楽屋風景

さらに楽屋や文士らの様子について、次のように記している。

その部屋は、板の間であつたから、薄縁がしいてあった。すこしおちついてから、よく見ると、向かふ側（つまり、右側）は、白いカアテンのやうなもので、三つに仕切られてゐた。私の方から見ると、一ばん左（つまり、奥）は、隅の方に蔓などがならべられてあつたが、半分は、初音麗子の場所らしく、まん中は、壁に、右から、中村青子、船越かつ美、と書いた札がはつてあつたが、そこには、この二人のほかに、附き添ひの母がゐたり、最後の幕（『鈴ヶ森』）の終りに一度しか出ない、中村貞以がゐたり、した。それから、右の端（つまり、あがり口に近い所）は、俳優が支度する場所で、ここも、また、二番目の『玄冶店』の終りにちよつとだけ出る、長谷川幸延の支度するところを兼ねてゐた。（私が見たところでは、鍋井、竹中、小磯、上村、古家、宇井、長冲、その他は、いつも、和気靄靄として談笑してゐたが、長谷川幸延だけは、細君と一しよに来て、支度をして、舞台に出て、それだけで、ほとんど誰とも言葉をかはさないで、さつさと、帰つて行つた。文士といふより会社の重役といふやうな感じがあり、東京と大阪に家々を持つたり、してゐるところなどが、他の無邪気な人たちと合はないのではないか。）[40]

宇野浩二は、風流座第一回公演の楽屋の様子を鋭く観察し、関西のメンバーたちが打ち解けているのに対して、大阪と東京とを行き来している長谷川幸延が他のメンバーたちと少し疎遠になっている点を記している。

b　風流座第一回公演の様子

さて、会場の様子は、「三越のウィンドウを飾る菅楯彦、中村貞以、矢野橋村、田村孝之介の四画伯の大絵看板が人目をひいて定刻一時にはすでに場内は満員の盛況　俳優が俳優だけに客席も縁故者が多く商業劇場とはまた違つて客席と舞台との交流はしごくなごやか」[41] だった。まず、この第一回公演の最初の演目は「お目見得だんまり」であった。配役は、先にもあげたが、

大　百	上村　松篁	若　衆	宇井　無愁
色　奴	小磯　良平	赤　姫	中村　青子

39）6に同じ
40）同上
41）33に同じ

武者修業　長沖　一　草刈娘　船越かつ美

である。宇野浩二は、「『だんまり』とは、芝居の狂言の一つで、多くの立者（注―すぐれた役者といふ意味）たちが、大時代な多種多様な扮装であらはれて、闇の中で、さぐり合ふ身ぶりをしながら、からみ合ふ、一種の無言劇である」[42] と述べる。『新版　歌舞伎事典』には、「天保年間（1830-1844）になると旅興行などの御目見得狂言として独立した一幕物の狂言があらわれるようになる。これを〈御目見得だんまり〉といい、代表的なものに《宮島のだんまり》《鞍馬山のだんまり》などがある。〈御目見得だんまり〉には、座頭級の役者だけでなく、一〇人前後の役者がその役柄に見合った扮装で出て、舞踊的な振付がなされることが多い。」[43] と説明されている。風流座第一回公演は、このような「お目見得だんまり」という演目で始まった。宇野浩二は、出演する文士らの選考について次のように記している。

> この『だんまり』に出る俳優をえらぶ時、上村は嘗て素人芝居に出た経験があり、宇井も前にちよつと劇団に開係したことがあるので、この二人は説き伏せることができた。ところが、小磯は、歌舞伎といふものを一度も見たことがないから、といって、なかなか承知しない。しかし、勧誘に行つた者が、根気よく、二度も、三度も、足をはこんだので、小磯が、やつと、「そんなら、物をいはない役があつたら、……」と、いつたので、勧誘に行つた者が、ほツとして、「あります、『だんまり』といふのが、あります、」と、いつた。すると、小磯は、妙な顔をして、「へえ、『だんまり』といふものがあるんですか、」と、いつた。[44]

小磯良平は、なかなか、風流座芝居に出演することを承諾しなかったが、セリフがないということで、この「だんまり」にようやく出演することを決めたようだ。宇井無愁も、「『風流座』楽屋ばなし」で、「生れてから一度もカブキをみたことのない役者がカブキをやるのである。小磯画伯などその一人。去年竹中氏に誘われて、セリフのない役なら出てもよいと難題をふつかけたところが、『だんまり』に出なければならぬ破目になつてしまつた。」[45] と述べるので、宇野のいう、二度も三度も勧誘に行った者とは竹中郁のようである。

> さて、稽古がはじまると、小磯は、はじめのうちは、口癖のやうに、「仕事ができない、仕事ができない、」と、こぼしてゐたが、しぶしぶ稽古に出てみると、めづらしくて、おもしろいので、そのうちに、わりに熱心に、稽古に来るやうになつた。しかし、小磯は、そばで、中山帯刀兼晴になる長冲が、指導者の寿美蔵から、「形が堅い堅い、」といはれながら、何度も編笠の代用の座布団をかぶりながら稽古をしてゐるのに、自分の役の伊達平の仕種を、（頭をふつたり手を上げたり下げたりする仕種を、）スケッチ・ブックを出して、いちいち、丹念に、写生してゐた。[46]

42）6に同じ
43）古井戸 秀夫「だんまり」（服部幸雄 富田鉄之助 廣末保編『新版　歌舞伎事典』2011年3月、平凡社）
44）6に同じ
45）宇井無愁「『風流座』楽屋ばなし」（『舞台展望』1周年記念号、1952年6月）
46）6に同じ

稽古が始まると、小磯良平は、だんだん余裕がでてきて、途中で自分の役の伊達平の仕種などをスケッチするほど、演劇の覚えがはやかったようである。小磯は、稽古の時には「寿美蔵先生に教わった色奴の型を、ダンスの足型式に丹念にノートして、初日の幕が開くまでそれを見ながら体操みたいにやつていた」[47]が、実際の風流座第一回公演では、「まんまとトチつてしまつた」[48]と言う。しかし、

> 小磯の奴の伊達平が、ときどき、仕種をわすれたりまちがへたりなどしても、決してあわてないで、ゆつくり、他の俳優のやるのを見ながら、それを真似て仕種をしたり、ちよつとニコニコしたり、するのが、何ともいえぬ愛敬があるので、それが、他を圧して、一ばん喝采を博し、呼び物になり、二日目三日目などは、見物席から、さかんに、「小磯屋ア、」といふ掛け声がおこった程である。[49]

とあり、小磯が本番でヘマをしたことが却って面白みを誘い、観客に評判になったようだ。宇井も「かえつてお愛嬌で、『だんまり』一幕は完全に小磯画伯一人にさらつて行かれる結果になつてしまつたのだ。」と述べている。実際、1951年5月4日の『夕刊新大阪』には、「“三日俳優”お目見得　風流座旗挙げ　まず色奴（小磯氏）が催笑弾！」との見出しで、「第一『お目見得だんまり』では小磯良平氏（色奴）が舞台でニヤリニヤリまず場内の笑いをさそい」と小磯の演技に注目した記事を掲載している。宇野浩二も、

> （現に、初日には、((といって、『三日芝居』であるが、)) 坂東寿三郎、中村成太郎、中村富十郎、その他が、見物に来たが、寿三郎は、「いつのまに、こんなに稽古なさつたのか、と、本職のこちらが却つて恐縮してゐます、」と、お世辞をいつてから、「しかし、あんまり上手にやるより、『だんまり』のやうに、どこかはづれてるところが、かへって愛敬たっぷりで、よろしおまんな、」と、いってゐる。)[50]

と述べる。文士劇ならではの、何が本番で起こるかわからない素人くさが、意外と、皆にうけ、観客を楽しませたのであった。

お目見えだんまり

47）45に同じ
48）同上
49）6に同じ
50）同上

次に第二幕目「与話情浮名横櫛＝源氏店」である。配役は以下の通りである。

お　富	鍋井　克之	多左衛門	長谷川幸延
斬られ		番頭藤八	初音　麗子
与三郎	竹中　郁	女　中	山本　直治
蝙蝠安	古家　新	権　助	木村　純一

この「与話情浮名横櫛」は、「通称《切られ与三郎》《切られ与三》。長唄家元四世芳村伊三郎の若いころの逸話を脚色した講釈・人情噺から取材して瀬川如皐が八世団十郎のために執筆したもの」[51] と言われる。この芝居の眼目は、「『しがねえ恋の情が仇』の名ぜりふで知られる〈源氏店〉の強請場」で、「〈源氏店〉におけるお富の浮世絵のような粋な美しさ、蝙蝠安の強請、与三郎の格子の外から中へ入ってせりふにかかる技巧などに見どころが多い」[52]。内容を簡単に述べると、次のような話である。

江戸の大店、伊豆屋の養子、若旦那の与三郎は、木更津に預けられていた。その浜で見染めた赤間源左衛門の妾お富と密会するが、情事が露見して滅多切りにされる。お富も海へ身を投げるが、二人とも一命をとりとめた。それから、与三郎は勘当されて無頼漢になり、相棒の蝙蝠安とゆすりに入った源氏店の妾宅で、死んだと思っていたお富に会う。お富は、和泉屋の大番頭、多左衛門の妾となっていた。多左衛門から金をもらって与三郎は去るが、のちに多左衛門がお富の兄だと知る。

因みに、「源氏店」は「玄冶店」とも書かれる。宇野浩二は、この「源氏店」では、初音麗子の藤八は、「素人劇団の『風流座』の中では、本職にちかいだけに、一ばん舞台度胸があり、芸もなかなか達者である。ところが、度胸があり過ぎ、達者すぎるので、この舞台では不調和であつた。それは、粉粧（つまり、顔のつくり）があまりに三枚目になり過ぎ、演じ方もあまりに三枚目になり過ぎたからでもある。」[53] と述べる。藤八が惚れている鍋井克之扮するお富については、宇野は以下のように絶賛している。

> 鍋井のお富があまりにも色つぽ過ぎて見えるので、藤八の仕種が、惚れてゐるやうには見えず、ふざけてゐるやうに見えるのである。
>
> さて、揚げ幕をくぐつて雨傘に顔をかくしながら、女中をつれて、花道を出て来る鍋井のお富は、（湯帰り姿のお富は、）あでやか、といふより、妖艶である。しかも、『艶』の分より『妖』の分の方がはるかに多い。そのかはり、揚げ幕をくぐつて、雨傘で顔をかくしながら、花道を二三歩あるいたところで、さしかけてゐた雨傘をすぼめて、洗ひ髪の白い顔をあらはした時は、満場の見物がはッとするほど、見事である、（ある意味で。）そこで、見物は喝采をし、見物は湧き立つ。実に心得たものである。[54]

しかし、鍋井はお富を演じるのにかなり、緊張していたらしく、揚げ幕の後ろで待っている間、「山本

51）関山 和夫「与話情浮名横櫛」（『新版　歌舞伎事典』同）
52）同上
53）6に同じ
54）同上

が、鍋井の耳のそばに口をよせて、『先生、さつきから手足がブルブルふるへて困つてまんネ、』といふと、『ふるへてんのは、僕もおんなしや、……舞台イ出てしもたら、かへつて、ふるへが止まるさうや、』と、鍋井が、こたへた。」[55] という。『夕刊新大阪』では、辻部政太郎「巧まざる喜劇　初日評」と題して、次のように「源氏店」を評している。

お富（鍋井克之）

> ▽……鍋井・古家両画伯に竹中詩人のトリオをもつてする「源氏店」は、なかなかのケツ作である、カブキ調の本格的なメリハリに、ところどころ調子がはずれたり、現代語調の棒よみになつたりするところにかえつて愛嬌があつてたくまざる喜劇を現出する[56]

やはり、素人くさく、調子外れになったりするところがうけたようだ。宇野も「ところで、ある新聞で、この鍋井のお富を、『先代梅幸と源之助を合はしたやうな容姿で色気十分、』と評してゐるが、容姿のことは別として、（しひて、ほめて、いへば、先代源之助より先代梅幸にちかい、）色気は、十分どころか、十二分以上ある。」[57] と述べている。また、

> お富は、ほとんど初めからしまひまで出てゐる上に、与三郎と多左衛門のかなり長い問答の間、だまつて下をむいて坐つてゐるところなど、専門家のあひだでも、『辛抱場』といはれてゐるさうであるが、その間、見たところ、鍋井は、たいへん神妙にやつてゐる。それに、はじめの方の、髪をなほしながら、ときどき、藤八をあしらふところや、（この藤八をあしらふところで、白粉で藤八の顔にいたづら書きをするところがあるが、あそこのところだけ、お富でなく、画家になつてゐたのは、しぜんの面白味があつた、）殊に、蝙蝠安をあしらふところなどは、まづ成功にちかい、といふ事にしておかう。[58]

鍋井のお富の演技は役になりきって、とても上手だったようだ。続けて宇野は、「それから、こんどの『風流座』では、この『玄冶店』が一ばん受けたさうであるが、それは、鍋井のお富も。（鍋井の一種の人気も、）その一つであるが、竹中の与三郎と古家の蝙蝠安もあづかつて効があつたからである。」[59] と述べる。宇井無愁は、「小磯画伯を誘つた竹中氏もじつは芝居には縁のない方で」、「そのかわりどんな役をふられてもいやな顔もしなければ驚きもしない。切られ与三 OK、（中略）知らないから泰然自若とひきうける。切られ与三などはだまつてじつとしていればこれほど立派な与三は当今のカブキ俳優にもい

55）6に同じ
56）辻部政太郎「巧まざる喜劇初日評」（『夕刊新大阪』1951年5月4日）
57）6に同じ
58）同上
59）同上

ないと寿海先生極めつき」[60] などと言っている。宇野浩二は、さらに詳しく竹中郁の演技について以下のように説明している。

竹中の与三郎は、まづ、押し出しが立派である、といふ事は、衆目と衆評が一致するところである。本職の俳優たちも、あれだけの押し出しの立派な俳優は東西の歌舞伎役者の中にもない、といつたさうである。つまり、竹中は、与三郎の押し出しに於いては、一等俳優である、といふ事になるのである。それが、惜しいことに、竹中のセリフにはメリハリが乏しいのである。しかし、私は、竹中が、あの有名な「…所は上総の木更津で……」といふ文句のあるセリフを述べる時、あるところは、本職の役者どほりの江戸時代の無頼漢の調子になったり、突然、現代の不良青年のやうな口調になつたり、するところに、なんともいへぬ愛敬と面白味を感じたのである。見物の人たちもたいていさういふところで拍手喝采した。二日目の日であつたか、私のとなりの席にゐた寿海も、さういふところで、いかにも面白さうに、拍手した。[61]

一方、古屋新の蝙蝠安については、宇野は「北海道の旅行ちゆうにも、自分の家にゐる時でも、思ひ立つと、時間などかまはずに、レコオドをかけて、稽古をした、といふだけに、セリフもよく覚えてゐるし、調子もまづ申し分がなかつた。ところが蓄音機の機械のせゐか、レコオドが早くまはり過ぎたのか、セリフの云ひ方が早すぎた。それから、古家の人柄が善良すぎるために、お人よしの蝸幅安になってしまった。」[62] と辛口で批評した。そこで、宇野はその感想を熱心な指導者の寿美蔵に話した。すると寿美蔵はまったく同感したという。そこで、「初日の公演がをはつてから、その事を、古家に話した。すると、素直な古家は、私の考へをすつかり呑みこんだらしく、二日目の古家の蝸幅安は、すこし憎らしくなり過ぎる程の出来ばえであつた。これは、やはり私のとなりの席で見てゐた寿海が、私がその事をいふと、お世辞でなく、『結構な出来でした、』といつたのでもわかる。」[63] と記している。

源氏店の風景

一流の画家は、たとえ素人の劇を演じてもプロ意識があり、観客の意見をすぐに参考にして、演技を修正していく能力があるのだろう。

第三幕目は、菊池　寛作「恋愛病患者」である。配役は以下のとおりである。

大学教授		貞一妻	
佐々木貞一	長沖　一	さだ子	坂本　富江
長男　哲夫	宇井　無愁	長女敏子	初音　麗子

60）45に同じ
61）6に同じ
62）同上
63）同

医大助手
松村謙一　　野尻　弘　　次女久美子　船越かつ美

この作品は、次のような内容である。大学教授で頑固な父佐々木貞一が、次女久美子と山崎の恋愛を認めないため、とうとう久美子が山崎と家出して外泊する。挙動を怪しまれ、二人は警察に保護され、久美子は家に連れ戻された。山崎家は久美子との結婚を認めるが、佐々木家の長男哲夫や松村の説得にも関わらず、貞一は久美子と山崎の結婚をどうしても認めない。最後は、失望した久美子の鳴き声が大きくなっていく中で終幕する。宇野浩二は、第一回風流座公演三幕目の、この演劇を見て次のように述べる。

> まづ、出し物として、失敗した。この戯曲は、菊池君の単純な物の考へ方が丸出しに出てゐるだけでも、菊池の戯曲の中でも、よくない方であるからである。それから、背景は、装置した人は凝つたつもりであらうが、よくない。あの背景は、本職の俳優になら向くかも（『かも』である）しれないけれど、こんどの俳優たちには不適当であつた。もつと写実的な背景であつたら、この幕に食堂に行く客が多かつた、といふやうな事が、あるひは、なかつたかもしれない。それから、俳優では、宇井の長男のまくしたてるやうな喋り方が、（宇井は一生懸命であつたかもしれないが、）全体のブチコワシになつた。野尻の医大の助手は、無難ではあるが、雄弁すぎた。[64]

宇野は、相当辛口の評価をしている。「巧まざる喜劇　初日評」でも「『恋愛病患者』は、各役甚だ神妙だが、少し出し物がキマジメすぎて損というところ」[65]と書かれていて、やはり、宇野の評価と同様、皆失敗したと感じていたのかもしれない。宇野は「恋愛病患者」の失敗を「今の一般の人には、（殊に、青年には、）父の頑固さ（頑固な考へ）が勝つ事になるのは、不満であらう。これは、さきに述べたやうに、ふるい時代のいはゆる『現代劇』をえらんだ企画者の考へ違ひである。常識的な云ひ方であるが、菊池君が作ったこの現代劇は、（発表した時はこれでもよかったのであるが、）今は『現代劇』として殆んど通用しないからである」[66]と述べる。『恋愛病患者』は大正13年9月に改造社から発刊されている。このような古い戯曲では、昭和26年には、もはやテーマが合わないので、失敗は俳優の問題ではなかったようだ。さらに、宇野は

恋愛病患者

64）6に同じ
65）56に同じ
66）6に同じ

「ここでも、初音麗子だけが妙にうますぎたので却って不調和になつた。それから、この芝居では阪本嘉江がわりに成功してゐた。」と言う。

さて、最後に、第四幕目「鈴ケ森＝題目塚の場」である。配役は以下のとおりである。

幡随院		飛　脚	藤間　竹遊
長兵衛	中村　貞以		
白井権八	鍋井　克之	雲　助	大　勢

「鈴ケ森」は、江戸時代の罪人の処刑場として有名なところであり、東京都品川区南大井２丁目あたりである。この演目では、侠客幡随院長兵衛と白井権八の出会いの場所が鈴ケ森となっている。白井権八が卓越した剣使いで、因縁をつけた雲助ら十数人を切り捨てる。それを籠の中から見ていた幡随院長兵衛が、白井権八を呼びとめるという話である。白井権八は、美しい若者で、幡随院長兵衛は、貫禄があり風格がある。すでにお尋ね者になっていた白井権八を幡随院長兵衛が江戸で匿う約束をするという話である。宇野浩二は「鈴ケ森」の観劇をし、次のように述べる。

鈴ヶ森

この『鈴ヶ森』でも、鍋井は、主役の白井権八になつてゐる。この芝居で、鍋井が、一ばん骨のをれるのは、雲助を相手にする立ち廻りであらう。六十の半ばに近い鍋井が、十八九歳の若衆になりきつてゐるのは、愉快といはうか、何といはうか、さて、何といひやうもない。ところで、『玄冶店』の与三郎が江戸時代の不良少年とすれば、この『鈴ヶ森』の権八は、やはり、江戸時代の侍の不良青年であらう。さうして、両方とも、いはゆる色男である。[67)]

鍋井は、今回一人で、お富と権八という色気のある役を演じたのであった。続けて宇野は以下のように言う。

さて、『鈴ケ森』は、いふまでもなく、なにからなにまで、型の芝居である。あるき方も、問答の仕方も、立ち廻りも、（つまり、刀の抜き方も、人の斬り方も、）ことごとく、型である。さうして、権八の相手になる雲助どもの斬られ方も倒れ方も殺され方も、みな、型である。かういふ芝居は本職の俳優でも一等俳優がやるものと、たいてい、きまつてゐる。主役の権八は、二枚目ではあるが、色男役であり、その相手の長兵衛は立役であるから、まづ、座頭役の演じるものである。それはさておき、この型のために、鍋井は、雲助との立ち廻りの稽古を、自分の家でする時は、自分より背

67）6に同じ

の高い、一人娘の澪子を、雲助に見たてて、何度も、何度も、稽古をした。[68]

鍋井克之は、大変稽古に熱心だったようだ。また、権八の相手になる、幡隋院長兵衛の役をする、中村貞以も、「自宅で稽古をする時は、これも、一人娘の青子を、権八になぞらへて、心ゆくまで、稽古をした。」[69] という。『風流座』の劇団員は、みんな文士劇を成功させようと精一杯の努力を続けていた。宇野は、褒めながらも、鍋井の権八は「型ばかりに気をつけすぎてゐた」ので、「力がはひらず、中村の長兵衛は、顔の色が白すぎ、肝心のところの動作をはぶいたりして、重重しいところがなかつた。」[70] とも述べる。「この芝居（『鈴ヶ森』）は、一般の見物には受けたやうではあるが、ちよつと工合のわるいやうなものであつた。」[71] と記している。

宇野の評価は厳しいが、「最後の『鈴ケ森』では中村貞以（長兵衛）鍋井克之（権八）の諸氏が、それぞれ一ケ月の精進？空しからず、下手でもともと、うまければうまいでヤニ下れるという結構な演技にハリ切つて、観客席からの拍手もしきり」[72] とあることから、上手すぎないところが、ご愛敬で観客にはかなりうけたようである。なお、「BK では『鈴ケ森』を中心に録音、五日の三時から三時半までのラジオコメディの時間に再生放送することになつている」[73] と書かれているので、「風流座」第一回公演の「鈴ケ森」は、ラジオ放送もされたようである。

終わりに

本稿では、大阪で立ち上げた文士劇「風流座」の第一回公演の様子を、準備会から内容まで、詳しくとりあげてきた。辻部政太郎は、「巧まざる喜劇　初日評」で、「第一回戦の今回では、総じて画壇勢やや文壇勢を押し気味の態、楽しい笑いが、広く大衆的であり得るような世の中でありたい」[74] と述べ、田村孝之介氏は、「みな楽しそう」で、「出演者がみんな楽しそうにやつてるのを見ると、出てみたくなりましたよ、芝居はよく見ている方だし、呼吸なんかものみ込んでるつもりだが、イザとなればやつぱり勇気が出ないでしようね」[75] と記している。熱心に稽古をして準備をしても、しょせん画家や文学者は素人で、失敗もするが、それがまた、楽しい笑いを惹起し、演じるものも観客も和やかにする。文士劇の中には、大衆の好む「笑い」があるのだろう。「風流座」は 1958 年の第六回公演まで続くのだが、とりあえず第一回公演は、成功裏に終わったと考えられる。 宇野浩二も「“鎌倉座よりマシ”」と題して、

「だんまり」はマズサの愛嬌だね　小磯氏の奴がオドオドしていて一番いい、一番まずいからね、みんな上つちやつて“上つた人気”みたいなものがあるよ、お富（鍋井）は先代梅幸にちよつと似て

68）6 に同じ
69）同
70）同
71）同
72）無署名「“三日俳優”お目見得　風流座旗挙げまず色奴（小磯氏）が催笑弾！」（『夕刊新大阪』1951 年 5 月 4 日）
73）同上
74）56 に同じ
75）田村孝之介「みな楽しそう」（『夕刊新大阪』1951 年 5 月 4 日）

る、鍋井はイキ好きだからイキな女になれたんだな、扮装はあれだけ出来ればいい方、ものをいわないともつといいんだけれど、与三郎（竹中郁）はさしづめ、先代羽左、あのくらいならいい方だ、藤八（初音）はやつぱり玄人だけに何処か違つて、板についている、鎌倉座よりましだね、あそこじや歌舞伎はとても出来ないからね[76]

と述べ、鍋井と旧知の友人だからかもしれないが、「鎌倉座」よりも「風流座」第一回公演は成功したと述べている。関東の「鎌倉座」よりも関西の「風流座」の方が面白く感じるのは、やはり、関西の方が笑いのツボがあるからだろうか。1951年5月5日付の『夕刊新大阪』の無署名「『風流座』めでたく打上げ“江戸で会いや賞”に中村画伯ニッコリ」という記事には、

関西在住の画家と作家による「風流座」第一回公演（本社主催・三越劇場）は「芸術のカーニバル」として世間の注目を浴びたが、きよう四日、盛況裏に三日間興行の幕を閉じた、ドーランや扮装に身をやつしてもどこかにそれぞれ画家作家の性格をチラつかせて、声援と拍手と爆笑が場内に立ちこめる　とくにきのう三日は祭日とあつて大入札止めの盛況で、補助席まで持ち出すさわぎ、いつもは見物される側の坂東寿三郎、中村成太郎、中村富十郎、中村芳子さんらが大挙して来場、見る方にまわつたが、寿三郎氏は「いつの間にこんなに稽古なさつたのかと本職のこちらが恐縮してしまいます、とくにあまりうまくやるより“だんまり”のようにどこか外れてろところが愛嬌タップリでいいですね」と語つていた

とある。なお、1951年5月5日の『夕刊新大阪』によると、閉幕後打上げ懇談会を三越食堂で開き、夕刊新大阪社から鍋井克之氏に「芸術院第三部賞」中村貞以氏に「江戸で会いや賞」小磯良平氏に「肩の荷が下りたで賞」竹中郁氏に「病みつきで賞」そのほか奇抜な演技賞がそれぞれ出演者に贈られた。さらに「この画期的な試みで上々の成績に味をしめたお歴々がさてこの次にはどんな趣向を思いつくやら、きよう第一回公演が終つたばかりなのに東京の文士劇『鎌倉座』との共同公演が早くも噂されている」[77]ともある。いずれの記事を見ても、第一回「風流座」公演が、観客に大人気だったことは間違いないであろう。

山口廣一は、「風流座」第一回のプログラム「ごあいさつ」で、「さんさんと降りそゝぐ太陽のもとで、大らかに仮面劇を楽しんだ古代アテナイ人の心を心としたいことなのです。といふことは、結局、みんなで明るく朗らかに遊ぶことに他なりません。正しい意味での『遊び』は生活の彩色です。生活の彩色はまた生活文化の正しい根源であるべきです。」と、風流座の公演を、古代ギリシャ演劇を培った遊びの精神と同じ意味で楽しむべきであると記している。さらに、「チャールズ・ラムの随筆のなかに”I　love a　fool ”といふ文句が、抜け目のない現実主義の賢さよりも、抜けたとこだらけの阿呆になりたい気持。馬鹿を愛するラムの精神を『風流座』の精神としたかつたのである。すなはち『風流座』を称して

76）宇野浩二「“鎌倉座よりマシ”」（『夕刊新大阪』1951年5月4日）
77）無署名「『風流座』めでたく打上げ“江戸で会いや賞”に中村画伯ニッコリ」（『夕刊新大阪』1951年5月5日）

愛愚歌舞伎（？）と呼ぶ所以でもある」[78] とも言う。リラックスして阿呆になることにこそ人間の求める本質であり、馬鹿げた遊びには人間性があふれ出ているものなのである。文士劇「風流座」が観客にうけるのも、そして、現在もまた、文士劇が続いていて、観客がそれを求めるのも、人間には遊び、そして、完璧性を求めない馬鹿らしさが必要なのかもしれない。

本論であつかう資料は、鍋井克之ご令嬢、木村澪子様より許可を得て紹介する貴重な資料や写真を用いた。厚く御礼申し上げる。

78）5に同じ